

# 明治後期の地方の幼稚園間の参照関係に関する研究

— 楠品次による広島女学校附属幼稚園への着目経緯を事例として —

金子嘉秀

(2013年10月3日受理)

A Study on the Reference Relations among Regional Kindergartens in the Meiji Era  
— By focusing on the case of Shinaji Kusunoki's reference  
to the Hiroshima Jogakkou Kindergarten —

Yoshihide Kaneko

**Abstract:** Hiroshima Jogakkou Kindergarten was established by the mission of Methodist Episcopal Church, South in 1892. The curriculum of the kindergarten already acquired reputations as “New style American kindergarten” at Meiji era. By examining the addresses held by Shinaji Kusunoki (1870 - unknown), educational inspector of Osaka City Hall, and by examining the contents of the letter sent from Osaka City Hall to the kindergarten, and the letter sent from Shinaji Kusunoki to the director of the kindergarten, Kurako Zusho, this research reveals the reason of Osaka's attention on the kindergarten.

From the letter sent by Osaka City Hall, The reason for the reference to the kindergarten that they were looking for new curriculum was founded. After giving the speech which refer to the Hiroshima Jogakkou Kindergarten, Kusunoki went to the kindergarten actually, and borrowed two notes of curriculums. Though, in 1909, Kusunoki and Osaka city hall has intense curiosity on the curriculum of the kindergarten, no rule for kindergarten in Osaka city was revised. Within the existing historical documents, however, those notice were the oldest example of paying attention on the sequence of the contents in the Keihanshin region.

Key words: Meiji-Era. Regional Kindergarten. History of ECE.

キーワード：明治時代、地方幼稚園、幼児教育史

## 1. はじめに—本論文の背景と目的

本論文の目的は、大阪市視学・楠品次による大阪市保育会での演説内容、および楠品次を中心とした大阪市側から広島女学校附属幼稚園への参照の経緯を事例として、これまで「中央」すなわち東京女子師範学校

附属幼稚園とその関係者の保育方法論に追随する存在として捉えられることの多かった、明治期の「地方」の幼稚園の能動的な幼稚園情報の選択・収集の実態を明らかにすることにある。

広島女学校附属幼稚園は、南メソジスト監督教会派のミッションの一環として、1892(明治25)年、同ミッションの「瀬戸内伝道圏」<sup>1)</sup>の拠点として神戸とともに重要な位置づけにあった広島のに開園した。その第一幼稚園は広島女学校校地内(上流川)にあり、その後第二幼稚園(三川)、第三幼稚園(己斐)、第四幼稚園(的場)が開園し、1912(明治45)年時点におい

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：七木田敦(主任指導教員)、山崎博敏、河野和清、鈴木理恵、中坪史典

て、附属4園で計225名の園児を擁していた<sup>2)</sup>。

1895(明治28)年には同幼稚園に幼稚園師範科が設置され、その卒業生は呉、宇和島、別府、神戸などの教会所在地の系列幼稚園で保育の任に当たることで、同会派の伝道活動の一端を担った<sup>3)</sup>。加えて、1909(明治42)年において日本幼稚園連盟(JKU)加盟園43園のうち幼稚園師範科を有したのは4園であり、同園もその一つとして他の会派のキリスト教系幼稚園にも卒業生保姆を送り出している<sup>4)</sup>。

この保姆師範科の教師は、ルイスビル師範学校卒業のファニー・C・マコーレー<sup>5)</sup>、アトランタ師範学校卒業のマーガレット・M・クック<sup>6)</sup>などアメリカ合衆国で幼稚園教師としての教育を受けた宣教師が中心となつて構成されており、幼稚園や幼稚園師範科において用いられていた保育方法は大阪市視学・楠品次ら当時のほかの地方の幼稚園関係者からも注目を集めていた<sup>7)</sup>。

広島女学校附属幼稚園の保育方法に着目した先行研究は田中(1998)、橋川(2003)、柿岡(2005)らのものである。田中(1998)の研究は、主に大正期の広島女学校附属幼稚園の検討を主眼とし、「子どもの興味」概念を中心とした進歩主義的な保育観を検討したものであった。小山(2012)は明治期の保育実践に関する先行研究の検討を行う中で田中(1998)の研究について、広島女学校附属幼稚園などキリスト教系幼稚園の改革動向が日本の公立幼稚園など他の幼稚園にどのような影響を与えていたかについて言及していないことを課題として指摘した。

また橋川(2003)や柿岡(2005)は、『聖和保育史』に掲載された二次史料<sup>8)</sup>を用いて、同幼稚園のカリキュラムの分析を試みたものであるが、広島女学校附属幼稚園あるいはその保育実践が他の幼稚園に与えた影響関係については、いずれの研究においても未検討であった。

幼稚園間の影響関係検討の必要性を説いた小山(2012)の研究においても、松本幼稚園の児童学的研究活動、神戸幼稚園の心理学的研究活動など各幼稚園の事例の検討はその個性記述にとどまり、他の地域の幼稚園への影響を十分に検討していない。またこれ以降も地方の幼稚園間の影響・参照関係に関する知見の蓄積は進んでいるとは言い難い。

しかし明治後期は「後続幼稚園」<sup>9)</sup>のさらに後続の幼稚園も増え、各地の幼稚園関係者は独自の保育経験を蓄積し、これらの経験から生じたフレーベル主義幼稚園への疑義に対する「解法」<sup>10)</sup>を内外に求めるようになった。このような時期の参照関係の実相に接近するには、東京女子師範学校附属幼稚園関係者以外の比

較軸的に用いられた対抗的な理論や、歴史の中で立ち消えていった保育方法論などにも光を当て、それらの展開・収束の経緯・過程を精査していく必要があると考えられる。

本稿では、広島女学校附属幼稚園に早くから注目していた大阪市視学・楠品次(1870-没年不明)による広島女学校附属幼稚園への着目経緯の解明を通じ、指摘が容易な影響関係の「存否」のみならず、どのような影響・参照関係があったかという「過程」も含めて検討を行う。そして、東京女子師範学校との間の関係性のみにとどまらない、明治後期の地方における幼稚園間の参照・交流のあり方の一端を実証的に明らかにする。

なお史料の翻刻および文中での引用に際し、送り仮名・仮名遣いは原典の表記のまま掲載し、読点を補った。また旧字体は主要な固有名詞を除き、できる限り常用漢字に置き換えた。

## 2. 明治期の大阪市の幼稚園概観

楠による広島女学校附属幼稚園への着目経緯を読み解く前に、楠の活動の拠点となった明治期の大阪市における幼稚園の状況を概観する。日本では1876(明治9)年に東京女子師範学校に附属幼稚園が開園して以来、1879(明治12)年に鹿児島、大阪、宮城の三府県に同校の直接的な影響を受けた幼稚園が開園した。このうち大阪で最初の幼稚園である模範幼稚園は、氏原銀、木村末の二名を東京女子師範学校に保姆練習科が設置(1878(明治11)年)される以前から見習生として派遣し、その帰阪を待って開園したものであった。

明治10年代の全国的な幼稚園数の増加は緩慢であったが、大阪府では1886(明治19)年頃から入園希望者が多いために入園を一時謝絶するといった状況が続くようになり、暫定的な措置として大阪府下の公立小学校に、幼稚園に準ずる方法で就学前の子どもを保育する幼児保育科が附設されるようになった<sup>11)</sup>。その後1889(明治22)年には、このような需要を幼稚園において吸収することにある程度成功し、文部省から「特ニ旺盛ナルハ大阪府ニシテ東京府之ニ重ク」<sup>12)</sup>と評されたように就学前の教育制度として人気を博し、幼稚園の園児数において東京府を凌ぐ地域となった<sup>13)</sup>。さらに1906(明治39)年時点において、5歳児就園率が全国平均で1.4%、東京府が4.2%といった中で、大阪府は9.3%と群を抜いていた(文部省1979)。

大阪府、特に大阪市は明治初年の経済沈滞を、明治10年代以降の近代的な工場制軽工業による綿紡績への転換を中核とした産業の近代化・産業革命によって脱

却し、後に「商都」「東洋のマンチェスター」と形容されることになるように商工業が興隆した地域<sup>14)</sup>であった。同じく近代的な「洋才」として西洋から導入された経緯のある幼稚園も、このような商工業に従事する階層に理解を得やすかったと推察される<sup>15)</sup>。

1897(明治30)年になると東西南北の四区の保育会で構成される大阪市保育会は、京都市、神戸市の保育会と連合し、保育問題などを話し合う組織として京阪神連合保育会を発足させた。また翌年からは非売品の会員向け雑誌『京阪神聯合保育會雑誌』を発刊している。この会誌は神戸市保育会の脱退・再加入などがあり名称の変遷があったが、明治年間を通して計29巻が発行・配布された。この京阪神地区の保育現場の実情を知るのに好都合と評価<sup>16)</sup>される雑誌には、各保育会や連合保育会の大会における議題・発言内容が掲載されており、第1回大会の議題「恩物の取捨選択」を皮切りに、フレーベル主義幼稚園の保育内容に関する是非や「改良」に関する意見交換が、連綿と行われてきた様子を読み取ることができる。

楠品次の名は第17号(1906)、第21号(1908)、第23号(1909)に登場し、特に第23号では広島女学校附属幼稚園への言及のある演説筆記と同幼稚園の規則類が掲載されている。この第23号での言及は、以下で検討するように、自己の幼稚園での体験に基づく意見という枠を超えて、実際に他の幼稚園に赴き、観察した様子を踏まえて意見を述べている点で、同雑誌に掲載された他の多くの保育関係者の「声」とは異質なものであった。では、楠はなぜ広島女学校附属幼稚園に着目するようになったのだろうか。

### 3. 楠品次による広島女学校附属幼稚園への着目

#### 3-1. 大阪市視学・楠品次の経歴

大阪地域の保育関係者から広島女学校附属幼稚園への参照の経緯の中心人物であった楠品次の経歴をみる。楠は1870(明治3)年に生まれ、三河高師村小学校長として4年間勤続したのち、東京高等師範学校に再入学、1899(明治32)年に同校を卒業した。そして直ちに俊秀を買われ同校助手兼図書主任となり、1900(明治33)年に同校教諭に昇任した。さらに1903(明治36)年に大阪府に招かれ同師範学校教諭兼同校舎監を経て、1906(明治39)年同校附属小学校主事に昇任した。次いで翌年7月に大阪市視学に就任<sup>17)</sup>、これ以降、愛知県一宮町立高等女学校長、宮崎県公立高等女学校長などを歴任した<sup>18)</sup>。また、大阪府師範学校で教鞭をとった1904(明治37)年から1907(明治40)

年にかけてのわずか4年の間で、主に地理科の研究を内容とする論文計25報を同校校友会発刊の『教材研究』誌に投稿している。このように楠は小学校において実践経験した後、大阪府立師範学校教諭時代は多数の研究発表を行い、その後には行政官としても活躍した人物であった。

加えて、楠は以下で検討するように1906(明治39)年から1909(明治42)年の間に大阪市保育会に招かれ、計3回の演説を行っている。それまで小学校教育一筋の楠であったが、約40園という当時としては多数の公立幼稚園を抱える大阪市の地域的な事情や社会的要請から、幼稚園についてもそれ以前の「地理科」研究と同様に、精力的に見識を獲得していった。

#### 3-2. 楠の幼稚園観と広島女学校附属幼稚園への言及

1906(明治39)年5月、当時大阪府師範学校教諭兼主事であった楠は、初めて大阪市保育会に招かれて演説を行った<sup>19)</sup>。この演説において、楠は「保育のことにつきましては別段経験がありません」<sup>20)</sup>と前置きをしつつも、友人であった乙竹岩造がスイスの幼稚園を参観した様子を「この園では「フレーベル」氏の主義に拘泥せずよく土地の風に応じた保育材料を課してあるのであります」<sup>21)</sup>と紹介している。このスイスの幼稚園に対する評価からは、楠がその職責として幼稚園に直接関与する以前においても、幼稚園保育内容においてフレーベル主義に固執することをよしとせず、また子どもの生活に根差した保育方法が採り入れられるべきという、神戸のA.L.ハウやその高弟・和久山きそら恩物の教義的な利用を重視し、後に楠自身が「固い」と評価するようになる立場に比べて、比較的柔軟な保育方法を是とする姿勢・態度であったことを読みとれる。

この2年後の1908(明治41)年に再び同保育会に招かれた楠は、大阪市視学という立場になり大阪市立幼稚園も監督する立場になったこともあり、「親しく経験したことはありません」と謙遜を含んだ自信の無さを伺わせるものの、その研究熱心な性格からか、大阪市内の公立幼稚園について「手当たり次第」に参観するようになった<sup>22)</sup>。

そして大阪市立幼稚園を複数参観した経験を踏まえながら、幼稚園において「子どもの発達」を助長するためには、幼児の「随意を中心」とする保育や「養護」の観点だけではなく、「訓練」や「教授」もまた必要であると述べている。そして「教授」は、計画的なものとは非計画的なものがあるとすれば計画的なものが望ましく、年間に行う唱歌・遊戯・手技などについてそ

れぞれの見通しを持つだけでなく、全体としての計画を決めておくべき点を大阪市立幼稚園の課題として示した。さらに楠は「計画的の中にも随意と強迫とがあるが幼稚園では随意の方にして頂きたい」<sup>23)</sup>と幼稚園保育の特質が子どもの主体的な活動にあることを指摘し、「私が拝見した中には唱歌などでも音階より始めて教へるといような大に強迫なのがあった」<sup>24)</sup>点に疑問を呈した。

さらに上記の演説以降、楠は東京の幼稚園などいくつかの遠方の幼稚園も参観し、幼稚園の知識をさらに収集した上で、翌年5月に再び大阪市保育会において演説を行い、広島女学校附属幼稚園について下記のように言及している<sup>25)</sup>。

#### (史料1) 大阪市保育会演説における言及箇所(抜粋)

又近来の女子大学の附属幼稚園の流儀とか松壽幼稚園とか広島辺の中心となつて居る広島県女学校の幼稚園などがある、長崎の幼稚園は神戸の「ハウ」さんのによく似て居るやうです、凡そ只今の所では幼稚の流儀が五つ程ある様だが宗教を加味して居る所は皆よく似つてをる様だ、而し「ハウ」氏の如きは固きフレーベル主義者であつて長崎もこれに次で固い、其の他は現今のアメリカ風を加へて稍和らかい様だ、又広島女学校附属幼稚園には主義を立て、やつて居るのをみましたがその目的及細目は別に記載のとおりである、こゝは「ミスック」と云ふ西洋人と日本人が共力して熱心にやつて居られます、又私が実際に見ましたのは神戸の原田村の松壽幼稚園であります、園舎のせまいのは惜しく思はれましたが庭園の広いことは又羨しく思ひました、人工で理想的なのは女子大学であるが自然物が沢山あつて天然に理想的なのは此の原田村の松壽幼稚園であります、森林の片端にありまして麦を見せようとすれば十歩足らずして青々したる畑あり直に菜の花はあり蝶は舞つて居るし種を播く時から取り入れ迄を見るときも見る事が出来るし莖や蒲公英は園舎を埋める程も生えてるし其の上汽車や電車の往復は眼下に而も手に執る如く見えるし少し頭を上げれば観艦式の光景も船舶出入の有様も一陣の下に集めるし垣根などは何方を見てもなく原田村全体が幼稚園の感がありました、私は実に実に羨ましく思ひました。

又主義としては統一的であるそうだが、例へば或る一日は手ならば手と云ふ題目の下に手技もやれば遊戯もする唱歌もやれば談話もすると云う風だそうです。

(『京阪神聯合保育會雜誌』第23号(1909)楠品次の

演説 筆記内容(p.20-24)より)

楠は日本女子大学附属幼稚園<sup>26)</sup>で用いられている方法をはじめ、5つの幼稚園保育方法の潮流があることを指摘したうえで、長崎の活水女学校附属幼稚園<sup>27)</sup>、神戸の頌栄幼稚園<sup>28)</sup>などのフレーベル主義色の強い幼稚園と比較しながら、広島女学校附属幼稚園についてはその色彩が薄く、現在のアメリカ合衆国の幼稚園保育方法の潮流が採り入れられていると評価している。

この演説で言及された松壽幼稚園は広島女学校附属幼稚園と同じ南メソジスト監督派教会が設置母体であり、宮崎カメ<sup>29)</sup>など広島女学校附属幼稚園幼稚園師範科の卒業生が中心となって保育にあたっていた。松壽幼稚園が原田村幼稚園から改称したのは1908(明治41)年以降<sup>30)</sup>であるから、楠は1908(明治41)年から、演説のあった1909(明治42)年までの間に同園を訪問していたと考えられる。

そして楠の「(松壽幼稚園では-引用者注)主義としては統一的であるそうだが」「例へば或る一日は手ならば手と云ふ題目の下に手技もやれば遊戯もする唱歌もやれば談話もする」<sup>31)</sup>という保育方法の説明は、広島女学校附属幼稚園で行われていた保育方法<sup>32)</sup>と類似・同様と考えて、楠が同系列の松壽幼稚園を参観・見聞した保育内容を形容・表現したものであり、「テーマ・主題に即した各保育項目の連関的展開」という中心統合主義的な特徴をよく捉えた指摘であった。

楠は1908(明治41)年の2度目の演説において、大阪市立幼稚園を参観して得た知見を基にして、幼稚園における保育内容の年間を通した計画性の不十分さを大阪市の幼稚園の課題と捉えていた。また、幼稚園保育においては、幼児の自発性は斟酌しつつも、あくまで保姆による「教授」を行うことを大前提とする立場であった。さらに東京高等師範学校や大阪府師範学校において教鞭をとった経験があったことから、小学校教育におけるヘルバルト主義カリキュラムの弊害を克服する方法として、東京高等師範学校附属小学校教諭・樋口勘次郎によって明治30年代に日本にも導入され脚光を浴びたF. パーカーの統合主義的なカリキュラム<sup>33)</sup>にも造詣があったと推察される。そして広島女学校附属幼稚園や同系列の松壽幼稚園においてもパーカーの方法論の流れを汲み、主題に沿った計画のもとに、日案・週案・月案・季節案などを構成することを企図する統合主義的なカリキュラムが用いられていたことから、彼が必要と感じていた計画性を持った「教授」を中心とし、フレーベル主義に拘泥せず、また地域に応じた保育内容を採り入れようとしている保

育方法<sup>34)</sup> という彼の理想的な幼稚園保育方法と近しいものとして着目し、参考にしようとしたのではなからうか。

### 3-3. 「大阪市役所からの依頼状」および「楠品次の礼状」の内容解明と意義の検討

では楠の3度目の演説以降、楠と広島女学校附属幼稚園との参照・交流関係に進展はあったのであろうか。以下では、聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵の「大阪市役所からの依頼状」<sup>35)</sup>、および「楠品次の礼状」<sup>36)</sup>の2点の史料を用い、さらにその後の経緯を探る。

「大阪市役所からの依頼状」は、「明治42年5月19日広島着」の消印がある、大阪市役所より私立広島女学校附属幼稚園に宛てられた封書と、原稿用紙一枚からなる史料である。これは楠が広島女学校附属幼稚園とその系列幼稚園の保育内容に言及した演説があった日から、4日後のことであった。

その内容は「本市幼稚園保育要目制定ノ為メ参考トシテ貴幼稚園保育要目其他はニ類スルモノ承知致度候ニ付乍御手数一部御送付ヲ下度此如御依頼申上候也」というもので、大阪市役所の名義で市内の幼稚園の「保育要目制定」のために、参考となるような広島女学校の「保育要目」など規則・カリキュラムに相当するものを送ってほしいと依頼するものとなっている。この史料からは、楠による広島女学校附属幼稚園の保育方法への着目には、楠の個人的な研究対象としての位置付けを超えて、大阪市としての公的・社会的な要請も動機・背景にあったことが明らかである。そしてその公的な背景・目的とは、大阪市内の幼稚園の新しいカリキュラムに関する規則を参考とすることであった。

また「楠品次の礼状」(史料2)は、3度目の演説から約半年後の「明治42年11月28日広島着」の消印がある、楠品次から広島女学校附属第一幼稚園長・調所庫子<sup>37)</sup>に宛てられた封筒と、以下の内容の礼状からなる史料である。なお文中の傍線は原史料のままである。

#### (史料2) 楠品次の礼状全文 (□は判読不能箇所)

拝啓

秋冷之節貴女史にハ益々御清康斯道之為これ日も足らず御尽瘁下され斯道之為慶賀此事ニ御座候、扱此夏初二参観ニ罷出候節ハ御安息日なるにも拘らず御懇切に御指導下され、加之御大切な保育案両冊長々と遠慮もなしニ拝借仕り数回返読多大之裨益を得申候、早速御返済度本旨に御座候も暑中休日ゆる〜尚一度拝見せんと延引致候所へ御存之通大火

災にて公務大多忙と相成八月中ハ望を達せず為ニ最後之一読か遅延漸く此頃最后之拜見終りて御返送申上度存居候、時ニ御手紙に接して恐縮仕候然れども此夏初之参観と此保育案之拜見とは小生研究之為大々の裨益を蒙り将来にとりて多大之参考と相成候のみならず最寄同志之人々にも大ニ御恩恵を頒ちて参考為致□ニ付長き間拝借之恩恵ハ斯界ニ大なる功德をなし居候、大阪保育界が貴園ニよりて指導せられしことハ少からずと存候間左様御満足又御喜び下され度希上候、尔後大阪之保姆たちに頻りニ貴園参観を欲誘仕候間益々推参御邪魔仕る者多からんと存候何卒御面倒ながら御指導下され度希上候、又近日女子師範学校主席保姆浦川はると申人参観ニ罷出づべく候、これも小生と同主義之人にて師範校之保育指導之中心たる人に付何卒よろしく御指導願度候、ミスクック嬢又西村静一郎先生ニも宜敷御伝謝願度西村先生よりハ夏頃保育要目御送与下され大なる参考ニ致居候宜敷御伝願度候、謹而貴女史及御同僚ミスクック西村先生之御健康を祈り貴校之隆盛を祈り奉り候

かしこ

四十二年十一月廿七日

楠品次 拝

調所女史 侍史

(聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵)

この礼状は調所庫子からの手紙をうけての返信がその内容となっており、これによれば3度目の演説直後の1909(明治42)年初夏に、楠は広島女学校附属幼稚園を実際に訪問しており、幼稚園の参観を行ったのち保育案2冊を借りて持ち帰っていた。そして保育案について熟読し、自らの研究に活かすにとどまらず、実際に見聞したことや保育案内容について、大阪の幼稚園関係者にも教え伝えていることが記されている。

また、広島女学校校主・西村静一郎<sup>38)</sup>、師範科教師マーガレット・クック<sup>6)</sup>らも具体的に名前が挙げられ、特に西村については保育要目を別途送付してもらったことに対する礼が述べられている。ここから、楠は調所庫子以外にも、彼ら広島女学校附属幼稚園保姆師範科の教師陣とも交流があり、知己を得たものと推察される。

さらに楠は同礼状において、大阪の保姆らにも参観を頻りに勧めていることや、女子師範学校主席保姆の浦川はる<sup>39)</sup>が参観に訪れる予定であることを書き記すなど、今後もさらに広島女学院附属幼稚園の実践から、大阪の幼稚園の保育方法・カリキュラム編成への

示唆を得ようとしていたことが読みとれるものであった。

では大阪市市役所からの依頼状の内容より明らかとなった公的な目的である、「保育要目制定」は実際に行われたのであろうか。1912（明治45）年6月現在の大阪市の法規を編纂した『大阪市例規類纂』<sup>40)</sup>において、1902（明治35）年制定の「幼稚園準則」<sup>41)</sup>が現行規則として扱われており、楠の広島女学校附属幼稚園訪問以降3年間の明治年間中に、これに替わる「保育要目」など幼稚園カリキュラムに関する新しい規則が制定された形跡は見当たらなかった。しかし、楠の礼状の内容から明らかとなったように、楠は『京阪神聯合保育會雜誌』にも掲載された演説を行ったのち、広島女学校附属幼稚園を訪問して参観や保育案の借用を行っていた。そして調所庫子に宛てられた「礼状」のなかで社交辞令を含んでのことではあるものの、幼稚園訪問や保育案借用によって「大々的裨益を蒙り将来にとりて多大之参考」となり、また「大阪保育界が貴園より指導せられしことハ少からずと存候」というように、広島女学校附属幼稚園の保育方法の影響をうけたことを指摘し、楠自身や大阪の幼稚園の将来のために大変参考になったと礼を述べていたのであった。

#### 4. おわりに一まとめと今後の課題一

本論文では楠品次を中心とした大阪市側から広島女学校附属幼稚園への参照の経緯に着目し、「中央」すなわち東京女子師範学校附属幼稚園とその関係者の保育方法論に追随する存在として捉えられることの多かった「地方」の幼稚園関係者間の能動的な幼稚園情報取捨選択と情報交流のあり方を明らかにした。

楠ら大阪市の幼稚園関係者は、東京女子師範学校以外のフレーベル主義批判を乗り越えようとする保育実践方法の潮流として広島女学校附属幼稚園の存在に気付き、系列園訪問では飽き足らず、実際に本園を訪問し、また保育案を手に入れて精査するなど、1909（明治42）年時点において詳細に研究し、市全体の保育カリキュラム作成の検討材料としていた。

これまでの研究より明治前期においては大阪の幼稚園の参照先は、東京が主であったことが知られている（湯川 2001）。しかし明治後期になると、情報参照先は複線的に拡がりを見せるようになった。特に本論文で着目した楠品次を中心とした大阪市の幼稚園関係者は、京阪神地域内のみならず他地方の幼稚園に関する実践知識を渉猟するようになり、1909（明治42）年時点においては特に広島女学校附属幼稚園の実践に価値

を見出し、この幼稚園に関する情報を収集していた。

もっとも、倉橋惣三が1910（明治43）年に東京女子師範学校附属幼稚園に赴任して以降は、倉橋の幼稚園論が関西においても徐々に支持を拡げていった<sup>42)</sup>。そしてそれ以前に広島女学校附属幼稚園から取得した幼稚園方法論は、大阪市の幼稚園規則という明示的な形では根付くことはなかった。

これ以降、保育内容四項目間や月間・年間など長期間を単位としたテーマの連関の重要性への言及・検討は同じく京阪神連合保育会を構成していた京都市日彰幼稚園が1910（明治43）年に作成した試作の「幼稚園保育要目草案」<sup>43)</sup>などに散見されるようになる。楠らによる着目や研究は、京阪神地域におけるテーマの連関の重要性に対する着目・検討の例として、その草分け的なものであった。

なお、このような大阪市の幼稚園と広島女学校附属幼稚園の間の参照・影響関係は、大阪側からの一方的なものではなかった。マーガレット・クック<sup>6)</sup>は1907（明治40）年6月26日に大阪市立愛珠幼稚園を訪問した足跡を参観人名簿に残している<sup>44)</sup>。またクック自らが発行者として責任を担った Kindergarten Union of Japan（通称 J. K. U.）の第4年報（1910）巻頭では、大阪市保育会のフレーベル批判に関する検討内容を翻訳した記事に誌面が割かれており<sup>45)</sup>、大阪市の幼稚園における保育方法論の議論の骨子を知りうる立場にあったと考えられる。

その後、二つ目の官立幼稚園である奈良女子高等師範学校附属幼稚園が設置され、地方の幼稚園も大正時代の終わりまでにはほぼ倍増した。東西の官立幼稚園の並立や、地方での長年の保育経験蓄積に伴い、幼稚園間の情報交流のあり方もさらに多角的になっていったのではないかと推論しうる。今後は各地方の史料の発掘を通じた、「地方」における幼稚園間の参照・交流関係のさらなる解明が期待される。

#### 【注】

- 1) 「瀬戸内伝道圏」とは、1887（明治20）年に宣教師ランバスが中国・四国・東九州の瀬戸内海沿岸を宣教地とした構想範囲を神田（2005）が表現したものである。（神田健次「学術資料講演会要旨 ウォルター・R・ランバスの「瀬戸内伝道圏構想」」『関西学院大学図書館報 時計台』No.75. pp.10-17.）
- 2) Kindergarten Union of Japan (1912) *Sixth Annual Report of Kindergarten Union of Japan* pp.43-44. 但し日本らいぶらりによる復刻版（1985）

- を利用。
- 3) Kindergarten Union of Japan (1909) “Kindergarten Department of the Hiroshima Girls’ School, Hiroshima” *Third Annual Report of Kindergarten Union of Japan* pp.21-23. 但し日本らしいぶりによる複製版 (1985) を利用。
  - 4) 前掲. 注) 3 *Third Annual Report of Kindergarten Union of Japan* p.23.
  - 5) Macaulay, Fannie C. (1863-1941). 1901 (明治34) 年から1905 (明治38) 年まで在職した (広島女学院大学 (2006) 『小さき者への大きな愛 広島女学院ゲーンズ幼稚園の歴史と M. クックの貢献』 (非売品)).
  - 6) Cook, Margaret Melinda (1870-1958). 1870 (明治3) 年アメリカ合衆国ジョージア州ロマ生まれ. 1904 (明治37) 年から1938 (昭和13) 年まで在職. 途中 1911 (明治44) 年一時帰国時にコロンビア大学にてディプロマを取得した (同上.).
  - 7) ほかに東京女子高等師範学校助教授であった和田實によって同幼稚園は、女子高等師範学校の保母を中心としたフレール会の会誌『婦人と子ども』内で「近時米国あたりに盛に行はれる所の所謂新式幼稚園と云う側の教育法」を「漸次輸入せられて現在私行広島女学校附属幼稚園では盛に之を實行して居る」(p.11) と紹介している ((1908) 「幼稚園問題」『婦人と子ども』第8巻第11号.).
  - 8) 聖和保育史刊行委員会編纂の『聖和保育史』(1985) には、「宇野 (旧姓清水) ミツの授業ノート」(原史料は2013年現在、現存せず) と称される指導案のうち、1905 (明治38) 年11月の月案、および11月第2週の1週間分の日案を翻訳の上タイピングしたものが、2日分の日案ノートの写真と共に掲載されている (pp.28-33).
  - 9) 「後続幼稚園」とは、山岸 (2008) が明治10年代に東京女子師範学校附属幼稚園に後続して設立された幼稚園群を指して用いた言葉である (山岸雅夫 (2008) 「明治10年代、20年代における幼稚園教育についての考察 (II) -特に、恩物と「数へ方」・「読ミ方」・「書キ方」をめぐって」『新潟大学教育人間科学部紀要』第5巻第1号, pp.61-73).
  - 10) 拙稿 (2011) では京阪神連合保育会の海外情報の収集状況に関し検討を行い、同会会員がアメリカ合衆国での幼稚園論争や新しい実践方法などを知りうる立場にあったことを指摘した。
  - 11) このような保育科が1886 (明治19) 年には13箇所あり、漸次保育法が改良進歩される気風があると指摘があった (『文部省年報第十四年報』(1886)). さらに翌20年には22箇所を増設されるほどの人気を博した (『文部省年報第十五年報』(1887)).
  - 12) 文部省 (1889) 『文部省第十七年報 (明治二十二年分)』 p.58.
  - 13) 大阪府は1889 (明治22) 年においてこれに加えてさらに22箇所の小学校に保育科を附設し、約2250名の幼児の保育にあっていた (前掲. 注) 12 『文部省第十七年報 (明治二十二年分)』). また翌年の『文部省第十八年報』(1890) では、京都府も加えて「全国中幼児保育ノ盛ナルハ東京京都大阪ノ三府トス」(p.40) との指摘があった。
  - 14) 例えば武部 (1973) は、明治20年代における綿紡績を中核とした工場機械制傾向の模倣的な導入を大阪における産業革命の一つの契機と見るべきと指摘している。 (『明治前期産業論』ミネルヴァ書房, pp.227-229.)
  - 15) 市内の幼稚園に通っていた園児の社会階層などについて、その全体像を概観しうる史料は残っていない。しかし一例として『京阪神連合保育会雑誌』第1号 (1898) 掲載の1898 (明治31) 年5月20日時点のものと考えられる「大阪府師範学校附属幼稚園概況」(pp.64-65) によれば、同幼稚園園児70名の保護者の職業別は、商業31人、工業8人、官吏8人、教員2人、銀行会社員11人、医師弁護士その他10人となっており、商業・銀行員・会社員といった商業従事者が多数を占めていた。
  - 16) 水野浩志 (1980) における当該雑誌の評価より。 (『京阪神聯合保育会雑誌 (1) : 創刊当初の内容』『幼児の教育』第79巻第9号, pp.58-63.)
  - 17) 教育實成會編纂 (1912) 『明治聖代 教育家銘鑒』第一編 p.528. より。
  - 18) 『官報』第789号1915年3月23日付、および『官報』第1397号1917年3月31日付より。
  - 19) 「保育上の注意」, 『京阪神聯合保育會雑誌』第17号 (1906) に演説筆記の形で所収されている。 (pp.9-11.)
  - 20) 前掲. 注) 19 『京阪神聯合保育會雑誌』第17号, p.9.
  - 21) 前掲. 注) 19 『京阪神聯合保育會雑誌』第17号, p.11.
  - 22) 「現今の保育事業に對する所感」, 『京阪神聯合保育會雑誌』第21号 (1908) に演説筆記という形で所収されている。 (pp.22-28.)
  - 23) 前掲. 注) 22 『京阪神聯合保育會雑誌』第21号, p.25.
  - 24) 同上。
  - 25) 大阪市視学楠品次の大阪市保育会第25回総集會 (1909 (明治42) 年5月15日開催) における演説内容の筆記という形で掲載された ((1909) 「幼児の比

- 較力と想像力』『京阪神聯合保育會雜誌』第23号, pp.20-24.)
- 26) 楠のいう「女子大学」とは、当時専門学校であるが大学の名称を用いていた日本女子大学の略称であり、幼稚園についての所感は、同校の附属園であった豊明幼稚園の状況について述べたものであると考えられる。
- 27) 文脈より、長崎のキリスト教系学校ということになり、活水女学校を指したものと思われる。
- 28) 神戸にあった A.L.ハウ設立の頌栄保母伝習所と、これに附設された頌栄幼稚園を指すと考えられる。
- 29) 1887 (明治20) 年9月8日生。広島女学校本科卒業後、幼稚園師範科1904 (明治37) 年4月入学、1906 (明治39) 年3月卒業 (『保姆師範科學籍簿』聖和短期大学所蔵)。その後、原田村幼稚園にて奉職した ((1907-8) *Second Annual Report of Kindergarten Union of Japan.* et al.)。
- 30) Kindergarten Union of Japan (1909) *Third Annual Report of Kindergarten Union of Japan.* p.22. 但し日本らいぶらりによる復刻版 (1985) を利用。
- 31) 前掲、注) 25『京阪神聯合保育會雜誌』第23号, p.24.
- 32) 拙稿 (2013) において、保姆師範科生徒・松下トクのほぼ同時期の1906 (明治39) 年から1908 (明治41) 年の保育案ノートの内容分析から、同園の保育内容の中心統合主義的な特徴を指摘した。
- 33) 日本の小学校段階における F. パーカーの「統合主義」の導入は、東京高等師範学校附属小学校の樋口勘次郎がパーカーから直接の薫陶を受け、明治32年に『統合主義新教授法』を出版したことがその嚆矢とされる (久木幸男 (1980) 「活動主義論争」久木幸男・鈴木英一・今野喜清編『日本教育論争史録』第二卷。第一法規出版, pp.126-136.)。
- 34) 拙稿 (2013) における松下トクの保育案ノート内容からの論証より。
- 35) 聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵。
- 36) 聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵。
- 37) 1874 (明治7) 年2月生まれ、華族。父は調所廣丈。1903 (明治36) 年4月広島女学校保母科入学、1905 (明治38) 年3月卒業。(『保姆師範科學籍簿』聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵) その後、附属第一幼稚園園長兼師範科助教師を1906 (明治39) 年度から4年間勤め、さらに1910 (明治43) 年度からは幼稚園総園長兼師範科助教として奉職した。(“*Announcement 1906-1907*” 明治三十九年三月 広島女学校附属幼稚園師範科署則” et al. 聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所蔵)
- 38) 1863 (文久3) 年、愛媛大洲町に生まれる。1885 (明治18) 年東京同人社卒業後、愛媛県の中学校にて教鞭をとり、後にキリスト教徒となる。広島女学校に招聘され1895 (明治28) 年9月より教務、1902 (明治35) 年より同校校長、1909 (明治42) 年にアメリカ合衆国のコロンビア大学に留学し教育学を専攻、マスターオブアーツの学位を取得し、1911 (明治44) 年帰日した。(教育實成會編纂 (1915) 『大日本現代 教育家銘鑑』第二輯)
- 39) 浦川は大阪師範学校々友会誌に以下の三つの論文を寄稿している。「高等小學校第三四學年女唱歌教授案」(1905) 「優美なる歌詞の教授」(1906)、「高等科第四學年歴史教授案」(1906)。また、京阪神連合保育会において1911 (明治44) 年1月発行の第26号から会誌の編集人になり、翌年1月発行の第28号まで計3冊の編集に携わった人物であった。
- 40) 大阪市 (1912) 「第九類學事 第一章小學校幼稚園」『大阪市例規類纂 明治四十五年六月現在』(国立国会図書館所蔵) pp.285-304.
- 41) 1902 (明治35) 年12月15日制定。訓令令第138号。1900 (明治33) 年の小学校令を踏襲する内容となっている (同上。 pp.298-299.)。
- 42) 倉橋は明治最後の第29号において、「幼稚園の新目標」というこれ以降の倉橋の活躍の原点となるような表題・内容の演説で登場している。倉橋は「フレール・オルソドキシー」批判を行ったこの演説以降、望月くみや膳たけら京阪神連合保育会の幹部の信頼を得て、倉橋は連合保育会や大阪市各区の保育会に以降10年ほど連続して招かれるようになった (森上史朗 (2008) 『子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事 (下)』フレール館 pp.17-20.)。
- 43) 京都市立日彰幼稚園の1910 (明治43) 年度「幼稚園保育要目草案」冒頭には、「本要目材料ノ配列ハ専ラ幼児心身ノ發達ト材料ノ難易トヲ考ヘ且ツコレガ季節ヲ斟酌セリ又材料間連絡ニツイテモ最モ意ヲ用ヒタリ例ヘバ談話材料ニ用ヒタルモノハ成ルベクコレヲ唱歌ニモ遊戯ニモ手技ニモ用フルガ如クセリ」とあり、テーマ間、および各項目間の連関を重視する内容構成方法を用いることが明記されている。(京都市立中京もえぎ幼稚園所蔵)
- 44) 「明治三十四年四月 参観人名簿 愛珠幼稚園」に、「明治四十年六月廿六日 広島女学校幼稚園教員エム、クック」との記名がある。(大阪市立愛珠幼稚園所蔵)

45) Kindergarten Union of Japan (1910) *Fourth Annual Report of Kindergarten Union of Japan*. pp.3-8. 但し日本らいぶらりによる復刻版 (1985) を利用.

## 【引用文献】

柿岡玲子 (2005) 『明治後期幼稚園保育の展開過程 — 東基吉の保育論を中心に —』 風間書房.  
金子嘉秀 (2011) 「明治後期の京阪神地域保育会における海外の幼稚園動向の把握状況に関する考察：『京阪神聯合保育會雑誌』を手がかりとして」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部. 教育人間科

学関連領域』第60巻, pp.259-265.

金子嘉秀 (2013) 「明治後期の幼稚園における中心統合主義カリキュラムの受容・実践内容に関する研究 — 広島女学校附属幼稚園師範科生徒の保育案ノートを手がかりとして —」『保育学研究』第51巻第1号, pp.6-15.

小山みずえ (2012) 『近代日本幼稚園教育実践史の研究』 学術出版社.

橋川喜美代 (2003) 『保育形態論の変遷』 春風社.

田中まさ子 (1998) 『幼児教育方法史研究』 風間書房.

文部省 (1979) 『幼稚園教育百年史』 ひかりのくに出版.

湯川嘉津美 (2001) 『日本幼稚園成立史の研究』 風間書房.